朝夷巡嶋記 第三編 二

イ13
939
~~37~~12

昭和13
第939
巻37

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之二

東都　曲亭主人編輯

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

中輯第廿三

友引るゝ小松の宿
途ふ吻く轍の江鮒

朝夷三郎義秀ハ江三三廣光を伴ひて義邦の迹を慕ふて加賀の小松と
ふ所に當ふいそぐとはれど廣光ハ曩ふ八嶋室平が戮兵ふと拄しと死左の股ふ
薄傷を負へりさせる痍ゆもあらざれば義秀ハ告ざりしよ信濃路ふ出しれ
ども漸こふ腫まと痛ませく歩の運びも自由あらぬまでよりて頻ふ焦燥のまに恋とん
まどゆあるうち義秀ハこのとをふ廣光が金瘡をそぐあく知りて驚死憂ひ
かくていよく義邦ふ追著くとあらふ有繋よ捨てふ去らまぐ我を
勇り我ハ激し技掖くもく行ふ思ひの外よ宿りをかさ移く小松の郷まで来つれ

どの佐味左内ハ鎌倉ふ召使まるく。今この里ふ左ゝざるふ義邦ゐ赤いつまぞろ。後まゝ人こを其処ゝの俟べ死。ろれども井平ハ。ろゝぐふ心刹さるの多粭此里ふ旅寝しゝく。俟ゝ。ゆゝとろひゝぐ。両人道次ふつゐゐゝくさつまゝのゐを相譚ふ義秀ハ去歳の九月。この地ふ遊歴ろゝくけまゝ紫閃ハ粗知まろ。且くさろふ逗留しゝく。冠者の旅宿を尋んゝく里盡れゐ客店ふ宿とりゐ。ゆゝぐ廣光ぐ金瘡ふ膏薬を打せゐゝて。両三日保養さゝ義秀ハひとり毎日ふ街頭ふ出ゝく。彼此を徘徊ゝ彼人こを索るふ義邦ゐゐ井平ゐ。面影似ろ人ふゝゐ遭ハゝ。そ。その次の日ゐ晨明ゝく旅宿をゝろ出ゝ。里の圮橋をゝろ渡ゆゝく。申明亭の邊を過ろふ日今新ふ掛けくるゐゝ。高牌の下ふ人の骨相書三四枚貼たるを里の老弱路ゐ人ふ。ゐんゝく其処ふ集合ろ。肩を比べ財を連ゐゝ。蜣の井ふ附ふ似ろ。

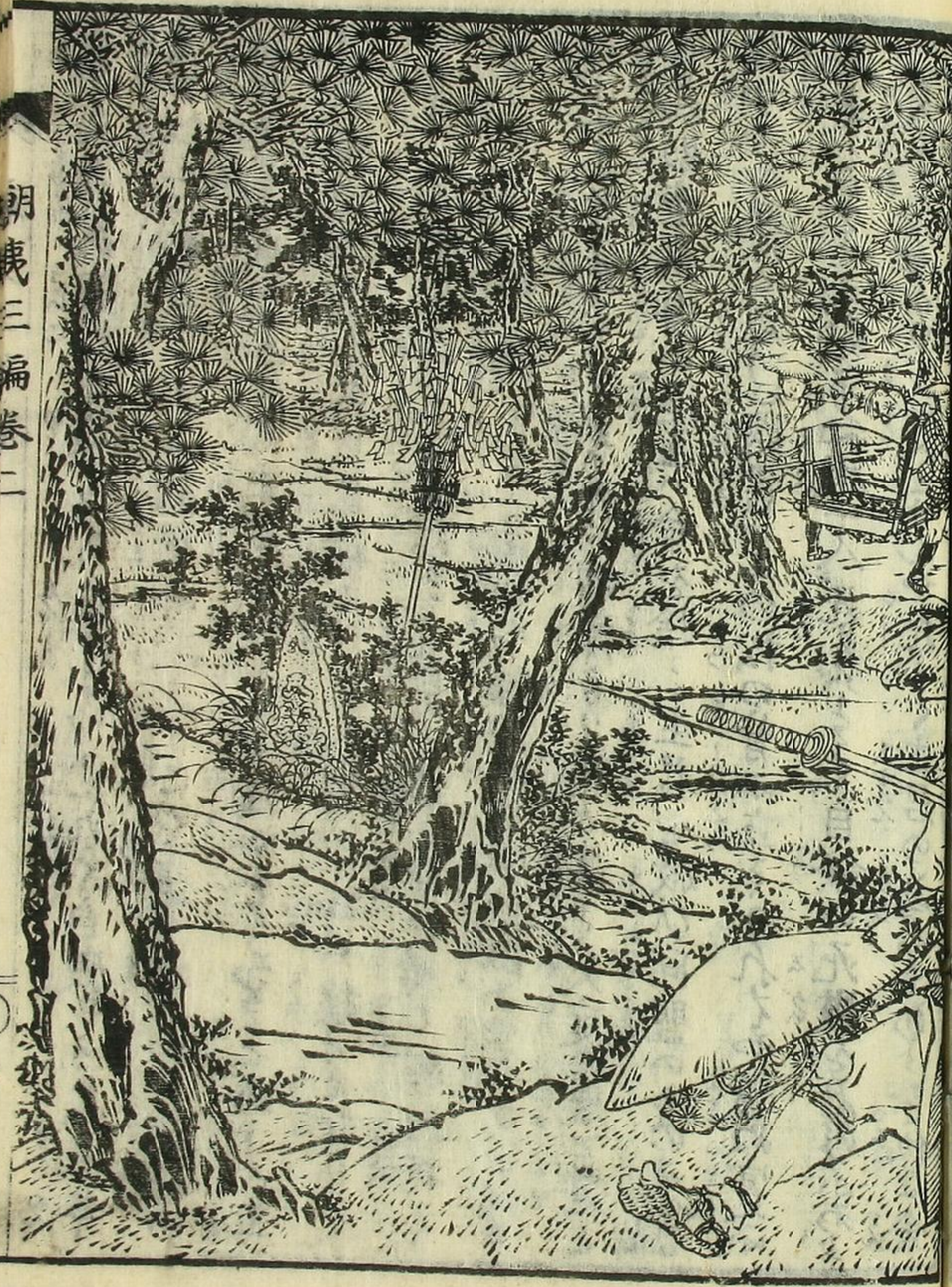
義秀ハ支の形勢ろろがゐまのゐ死ふゐふゐねバ衆人の後ゝろ。笑ゑ揭げて。これを見るふこの骨相書ハ別人なるふゝ義邦主後と井平とゐゝぐ身さ人。ゐゝ。ゐゝ罪科の廉を記ゝ注ゐ。搦捕ゝく進ゝさバ如此ゝこの賞禄ゝろ。せん在処を知るゐ訴稟さバ。同類ゐろゐゐゐ身の咎を宥免てこれゐゐ賞禄を賜ゐべゝ。と鮮ゐふ書ろりける原来ゐぐゝ人ゐりけゝ。といゝくどの騒い乳ろゐゐくさらぬさゐゆゝく立退死ろ。足早ふ旅宿ふ還ゐさて廣光ふ同様ゝゝと支の廉を密語ハ廣光ゐゝくゝち驚死ゐぐ身ゐろ患ゐふ足ゐ。冠者ハ何処ふ在ゐゐんゐろゝとゐ。限りゐゐ加以朝夷ぬ。和君さふ支ゐふバ膾を嗤とも及ひぐゝ。某をバゝち捨置ゝく疾脱去ゐ人とゐふ義秀ゐゝく乳ゐぐゝ。そゐゐ謂ゐぬ口誼ゐり。和殿ぐ金瘡いぐ愈ぐ進退不便ゐゐバとゝく。ゝち捨て走ゐゐバ足利ゐて矢石を犯ゝて。

いづでう和殿を救へべ。勇士ハ元を喪ふとも忘るまじ。さまざま命を義に
よりて鴻毛より軽ふべし。今更驚くことなかれ。と云ふて激せば廣光感
涙を拭ひあくまでかくやでふいふ。我が為のまくふせば君が仁義と云ふ
ぬふ。然れば共倡ふ。さてよりん八寇て危しのふせまと當
惑の小頭を要時傾まば義秀ハ父死る。我解死後方をアトクリて。
長談ハ憚アあり。所詮和殿を扶掖て越中帰員の岩神ある稲向
判五が宿所まで退くべし。アまりふ温子井平ハ思慮あるのに佐味が
この地に在ることを知らふ。冠者ふ倶に虐と。さらふ逗留とべくもあれど。
何と云ればその夜さり。和殿ハ一人留アて領主の討兵を引受さり。さらば
その初より和殿の存亡ハ定さ。又義秀が和殿を救へく共ふ迹より来
ると云ふねば久しくこの地に俟べくまど。倘彼藁二郎を傅遣せし。和殿の
内室後良井どの。途ふ冠者に追著さらば。ロ状を必傳人ある人ハ
吉見殿との小松ハ越ぐ井平ふ食共倡に稲句許落ち。吾们を
俟ふやあくん見も亦知らべ。そふとられくもかれ追捕の沙汰厳重なれば。
今ハ要時も単り出ロハ義秀ふ任しく。とく出べとのそふ廣光この
議に後ひく苦痛を忍びく行装をこの間ふ義秀ふあるべ。召て旁銭と
取ゼ同約の病著も大ふ痛ぬ習と云べど左に右ふ心ひこ死せる
まば今より起とも四五里ハ行べ。復て本めとのひろけく。やふ面へ立
出れハ廣光も後に跟ひく疼痛を忍びくりろ共ふ板敷ふ伏をかけく。
草鞋を穿ひ行李を背負ひ公立ふくして出る程に。あるべハ門邊ふこまと
送りく後の宿りを契アけり。かくて義秀ハ廣光を勸アて越路を投て赴
くふ廣光ハ人目ばり旅宿を出る時あくそ禹歩ふ運びりさまとふ堪ず死

疼くもあるまゝ一町あるいてハ立とゞまり。二町あるくハ息を吻ついと悩しげふ
凡あるまゝ人目あるまゝ義秀ハ肩ひもえあらぬゞふ掖まゝこかく
ちく小松の郷を出離き一里あまりあるけるまゝ日ハとゝや未の下刻ふ到ぬ。
此処数十町左右ハ芝生ありて松原あり。廣光ハあくふ到て苦痛腸を断
可あるまゝ。一歩も運ぶゝと叶ハぬ。松の株ふ尻をもたせ背を緑ふ推當て眼と
同じく顔の色さゝそと凡々義秀ハ遠く懐あり用意の藥をとり出し
い〻遍とあく呂を勧めてさあくふ勧まゝ廣光同じく眼を睜て朝夷主
朝夷主よりあれちのゞ羅ふ肝りてくさゝそあ公ハ焦燥あるゝ只いちかゝく
主よりあくとてもかくてもこの痛みでハ露命もさふ竭ぬべし。冠者の先途と
あゝぶるあ呂のゝ死後の恨あるまゝでも歎ぬるそ甲斐あるふもあらぬ。
覚期究めくゆとい〻声さゝよ弱りけり。義秀こまゝを伏あゝぶ女ゝ見ると

いつくよ和歌深くふあゝぶまゝども曩ふ長途を主従ふ再傷をあらうん。
命ふ恙やふあゝぶ死さいくより人家ハ尚遠かり路あく人も稀あるまゝ今宵の宿
まゝぐ背負くちん必ゝ〻と慰めあゝく。あゝて背をさゝよぶまゝ廣光頭をこち
掉てゝ里へハ遠しとも凡々人あり定めゝ〻見れをゝ力ふ負れあゝば。
必人よ怪しめゝまゝく禍其ふ起るゞゝ。只いち捨く走り去人疾由ふ死さまゝ。
あゝくふ待べくもあゝぶまゝハ義秀声を激しく復しても仕ゝ死ふ義ふ
仗ゝ死ハ両人合體和歌ゞ病ハ凡ゞ病ゝ和歌ゞ死あゝば。凡まゝ死べし。背
負くゝ人ふ怪しめゝまゝ搦捕らゝとあゝば。それゝでの命運あり。何を躊躇
とゝふあゝ負まゝ人とゝを取りく肩へ引被け立んとゝまゝば廣光ゝ〻く
引放ちやゝ待の人かくまゝでふ諫ゝらゝをいゝでゞ推辞んいゝ〻隨ふまゝ〻れども
息絶しくて堪ゝ〻水あゝぶ只一口咽喉潤さゝくあゝれといつゝ義秀沈

吟ずるに員ハ水ハ忌むべかれどもこれとても飲せずして命終らばそれも益なし。只今員さる殘るよりねバ藥とても与人ニ食ずるあるべしと肚裏ニ尋思しいろ〳〵趨まろぶるうちに水ハあけまゝども田井を索ねく汲めて来ん且くまて俟ん〳〵といひて腰ある瓢を拽て迫ふ〻ある山田の裾ハ樋の口あるんと知とり点滴足ハ信〳〵く走去けり廣光霎時目送りて流る〳〵涙を揮拂ひ日来ハ猛烈壯士ゞ心のごとく技掖死背負んとまぐ真成ハ勦る誠ハ親族でもよハ有るべ死好意旅ハ伴侶世ハ惻隱と彼諺も今ぞ思つれあ死ハ命もさまぐとく〻ハ〻故ハ彼人さ人ハ支ニ遭ぶ〻れ彼人を害まるんかく〻義とのひ信といふんや殘ハ炎所を外れさまでも破傳風とあり〻ハとてもかくても生ぐ〻縱霎時存命とも婦員までいろでるあるべ死只この俄ハ自殺〻く彼人の為主君の為ニ策を送まべ〻。吁ゝあり〻と知ぬるまぐち。亂式激〻ても弱りもく肘を撫りて腰あるハ黒斗を援出し懷紙を引伸〻墨ハ深てあひ首の戰ぞ筆の運びさ人定めあ死世のさまぐとまひ遠まハ縱〻一枚のかゝあるぬ刃のあられ況今紙限りの命毛とまられバ妻もよも俟心忠義ハ家と忘れあ紙何歎ぐ〻死。愚痴なる死小三ハとく大死くあり君ニ仕てなぬ人の志を嗣ニ命。ゝひ〻ひあく朝夷生の男の家ニ刃を寄ぬまぐ。かるハ此主君のこ何の里ニとゝまるとも廣光ハ亡魂ハ影ハ立身ハ添て付まゝ守ニ在まらんかゝ〻も朝夷生日来の必抱受あるゝこの世ハ〻ハ報ひ〻〻名殘惜やとの人ぐ〻ハ心ハ有るゝ胸ハ浮めバ幾枚ゝ書損る紙引裂て筆をとゞめて讀む一通追捕嚴重あるハ〻。義邦義秀井平ハ云云の河原あく共侶ニ人水〻とんぬ某深殘と



金瘡を苦
み〳〵廣光
策を遂さ
んとす

負ーろハ主君の最期ゐ後まろ。進退ちゐ究く自殺ちゐの也手
ぢひ。えのさらーひろこう。
月日江三二廣光とちくろの中ゐ続久ー。この一通を送ーかゐ追捕の
さた。これ
沙汰も見ようろ止んさゐ主君も彼人こも。後ゐちくあることあらん主
ん
君ゑ憑む彼人こへこれ只末期のすゑ志えゐ時や移りうんさゐとそ
そゐきく坐を白くいそぐとゐまで衰ー。腕ゐ重ゑ腰刀鞘抜捨く
ろり直ー背て松ゐ倚かけく。南無ゐ阿弥陀仏と唱つ。肚ゐ突立んとゐる
ゐ。
祖ゐやよ等ちゐ。と義秀ハ樹蔭ゐり衝と寄く矢庭ゐ脇と楚と
ろう。
食和殿重病身ゐ逼まハ命を捨ー主君を救ひ同盟のゐ人ゐ。
後ゐちくせんと謀りし送書ハこの松の背ゐ立くゐれちや讀ぬ寞ゐ
忠義ハさうとあれども。和殿一人死まハとく自餘の死骸をんゐるゐあ
孫ハ水といゐても実夏とせんや。死ーく主君の為ゐあらゐ仇ゐ食

謀のひかるゑ送人ハ愚あるゐ。且この刃を放ゐ人と理り迫て諫れゐ。
廣光とゐまるゑ乱ゐあー。この期ゐ及びく千萬句も問答ハ益ゑその
ゑ放ゑ死ーちたゐ禁ゐ情ゐ仍て情ゐと怨ゐまハ義秀ハ彼
あんだいあく殺さぬ死ちるゐ及ハゐ和殿ハちゐ亦活ゐ。その譯
いんと刃を奪ゐく鞘ゐ納めく引提く走ゐ出ちくゐを抗てあいく
とさー招けハ先ゐ進ー行客両人後ゐハ一挺の行轎と扛ーく喘ー走ゐ
く。
ゐるこの行客ハ別人あゐ。岩神ゐる一三ゑ藁二郎共侶ゐ彼根々堅
平ゐ復輿を舁ーくちゐよ集會ゐ。藁二郎ハいちゑ安く廣光とんて
声をかけ三二主ここ伺くゐハまーく宴きゐ。心地ハいゐふゐとゐと訊
きく廣光。
ゐんかゐんく。これハく。とゐりゐ。要時苦痛を忘くちでゐ
ゐひけゐ死再会の歓び乱ゐ顕まちゐ。當下義秀ハ廣光ゐ一三を

指し示し江先ハ早ク識ざるべし。ことハ見るゴ恩人その名たるよハ豫てもいひし。
在司畷の一三人と告まハ廣光やもく欽び膝折數くを一三ハ禁めて躾て
對面を藁二郎も傷ふをり。三二ぬしハ僕さへよこの処へ来つることを不審
ありひるん。僕ハその夜さり朝夷ぬしの指揮ふ従ひ内室れ子息ふ倶し
やねくせ夜を日ふ継く急しくぶ幾日もあくで越中ある岩神の里稲
向ぬしの宿所よいもれて一三殿ふ對面し。竊ふ縁由を告く朝夷ぬしの
消息をいはまし隨ふ遍与ふけまハ躾く閑室ゑ招入らまあゴ此夫婦
出迎さく朝夷ぬしの安不宅問浅良井殿ふより式笈小三二殿を慰さふ
その歎祢等閑あらまど友鶴ゆも對面しく朝夷殿ゑ異あるよ式
さろるさせあハまとくさるあくこの母子を奥ゑ潛せ僕ふ酒食を賜て
草鞋銭さへ牽れさりかくて次の日僕ハかり去んと思ひしその曉ごと

より胸痛しく天ハ明まどもも枕あでくまどあり人ハ親を刀野ふ殺せ復や
故主を寃家のあふ謀られさるぶ朽をしさふ親苗四郎ぶ垂を親族ふ
うち任せ小兒を背負その母御を扶掖々幾十里の長途と志ゑ
此彼の心労ふよりくゑ。見より毎日ふあるゴ此夫婦一三ぬしの真成ふ
人さへ冊さへ看病せるふ醫療等閑あらざまハ僅ゑ四日たるゴ
胸痛ハそや愈ゆれと告まハ一三さまハ又さの日より必殿温樫の下知と
さく。吉見主従朝夷ホその徒まぶくく四人骨相書をあくく索ふ
罪科の趣如此ことそや岩神へも徇らまてり。これより圃宅一層の
憂苦をやうくさのびくふとやうんかくやあるぶれと主人此夫婦友鶴との
僕さへゑ額を合せ浅良井殿ふ相譚ども。先ざるのハ涙のくく往方も
さくあぬ一達を楽しでもよれ智恵ハ生ぎ。さまども聊ふすぶを沼こう。

冠者殿ハ宵の間ニ井平とらひ和郎を将て加賀の小松の佐味竺
内を心ざして出やしらん。夫より外ニ披てゆくかたハあらじと浅良井どのが
告る所聞けバ現さもあらん佐味ハ小松ニ在らざれども冠者ハこゝまで所
し知らざしく加北へ赴きのつかたあらさきとふいひくるて候と見ハ二三ぬし。
此方の三郎共侶ニ又唯冠者の跡を追て加賀へ赴くるもあるべし。
かくまバ僅ニ往方を志るよかりハいそでまる四人小松ニ落合てお客を向て
くまハようしこう途ニて宴ニおあぞ後悔其処ニ立ぐらいって窮ニ迎とる。
と商量既ニ一決してまゐるべしと早すまし冠者主従温子と母らんが面
影ハ絶て認らず。朝夷生ニ逢ざしく彼主従ニ先遭ハ何をもてよ依ぐと
せんこれも又不便のるそいふにせましと躊躇と見慕二郎も共侶ニかゝらん
といふまちとぞえり。当下又愚按あり。吉見殿ハ面色白く一下際目ぶら

力弥とぞ仰のくこれそバ後ニ隠さバ只人目の関所越るかりんとおもひかんれバ
心ならず死根ぬ薑平さへニ将て昏夜をこゝろ途をいそぎ。けふ小松の里ちる死
山田の裾を過ると死朝夷をあぶ樋門ある水とある端るくあひぬその
と死の歎しさ今なほ胸ハ踊るぞさて立あがる主君を祝しくりかる
おぼひ候べ死る所。愛けバ冠者の往方ハ志まずと三二どのハ金瘡ニ患
つまさく彼処ある松原ニ憩ひさくそりゐれよ。そゞ去りて各位ニ逢つるよのを
告べ死よ跡より来るといひあへん松原さしさ去かくる朝夷どの足実
勝まざいさく後れぬべしと声低しさ抑ろかまハ義秀も又傷よりて江ト上よ。
あれを仰せる欽慕二郎ニ誠心あれども吉見譜第の家臣ニあらぞ稲
向夫婦と一三とふ義秀ぞ縁者之志ろ原も猶冠者の為ニ心を用ると
斯のごとし。和殺とてまた友あり臣え日来ハ心を竭しくも竟ニ冠者ニ遭ぞ

ちく。ひとり死人この助け成らつる佛の不可思議。儒の所云天命。疾この
復び乗移り岩神へ勤行く。癒養生をちの人う。五日和敬が成ろうく。
亦復冠者の往方を索んさく。と勧ぶ廣光感嘆慚愧く涙を禁め
難くも。ちはど太息をつ孝みの門の不忠あく義士の族の薄情を。
再び必死を脱まちば。皆是和君が賜え廣光がこの恩ひと半分が分
ちねうせば。今さう拙を。ちうんや人の情がよまばとく主君を迎れんが
早せく。ちう轎子が吾倩無人ハ物体あり。といふも果ぞそハ愚癡。
和敬が復が乗らどして冠者がちく来ちんやちく。が命を全して後
日を期ふが真の忠信杉子を定規ゆるおふと罵激く。三五と菓二郎が
目成注をまハ西人齊一廣光がち成合り腰を抱死揚つ。ちうまなく
復輿が扛乗せう當下根岐茎平ハ息杖成横たう。義秀ぶほと

ぶが居ちう。恭く跪死を哀の再会を祝せ。ぶ義秀これを労ひて。廣光が
人を妻弦菓二郎が耳を引く云云と密語ハ菓二郎ちち忽根岐ホが意
味成侍て復輿と擡出さう。そのが方ハ後方が引添て舊来路へ赴死ぬ三ハ
そのちう成ちく。そぶく猿當ちハ義秀をとちち對ひて。松の梯が尻を掛阿
爺ハ廣光が氣色をみどを。渠重病ゆ焦燥く腹を切くんとしつる死吾倩
折ちく立ち。更が阿爺ホが助け成ちく。遠がその死を禁めちうのハでも女
才ゆ死ちの氣とも。寔ゆ重死金瘡あるぶハ故抱を憑むのく某ハちうり
別まく。義邦井平ホが環會廣光夫婦がちく成休人稲向夫婦及
鶴ホよりちう成ちく。ちとのひとけく立んとしまハ一三驚く推とめ。
さてもく侍えぬ人ゆ。吾倩がちるくちやぐ来ちハ誰が為ぞとちのひふ。
件の沙汰をやーちう。稲向殿の拙ちのひ内室の周章悲歎友鶴とのハ平が

なぎとのひて腹に刃を當て。あたらも日にわし目にみえし間なき透なに是首の隅彼処の隅に泣ぞり。ききまでと氣に病む二親を見るも鬱悒胸つふしさかりで和睦に環會ねかかてんと思へバそそ鬼毛可の心あて哉。よるべに昼夜長途哉走りてとみくまで逢あがら故く何処へ遣るべき。わりのみが虚言欤実か欤ハとまえ見て妻子の歎きを思ひ汲み且岩神へかへりみへ還りゐへと繰かへし。遽しく懐を探りて友鶴が書封をとり出でくるに遽せず。ぎまおもぶり封皮を断ち披き讀果て幾條ありし引裂て袂に納め。女子ハよろばりおもくし。心捩きのあれしで。かくもあるべきるなり勇士の妻ならハ似げなき所行ぞ假染の別を惜む。冤魔に驚き魘れて夫を膝に引著おくとも。天の作せる禍が福となるべきや。何爺よくやすく見んなへし。これ友鶴氏娶らぬ前に彼友達のもとでハいぞ。なかなか妻子の顔を見んとて危窮の友を憐まバ。初より友垣を結ハぬにあくと遠さんハあら

ぞやと義に勇む誠を感じて一二ハ又いかにもありえり且く弄ぶる。松栄を捨てて。宝物を拂ひもてまとも彼友達の在処を知てすくにわかる猶。一个月にあるべき欤二年三年ありて逢るべき欤あふと逢ざるとハ不定なりや下さび岩神へ還りて更に旅立とも今にして遅きにあらず。路次に面を曝んより隠れて時を待なそよけれ。おん身足に膂力ありとも旅にあらんハいと危し。枉て愚妾が随ひまゐへと復諫まハ芫尓と笑ミ。そはいふのみハ女子なり。幾千騎に囲るるとも。一人境を越ゆるより易し。倘運竭なバ小敵にも大刀折て生捕れん。かくて鎌倉に牽るるともこれおのづから処分あり。命に恙あるべし彼友達欤索ぬるに。二年ありて沼遭ぬ三歳が程ハ岩神へ還らんとまでのよしを稲同氏と契るよ待なくくぞ。あつ阿爺にあひぬまハ心からにあけまじども口ハいと惜むハ去歳のその月。浅良井に領ぐる母の像見の舊衣を、その夜さり彼女房。いと睠しく出されバ。

取忘れしか疑ひあり。とのゝば一三うち微笑そゝ五侍も認ゆる。母れぐゝ織の單衣被ゐ一たるふあゝんぎゝん。そゝこゐれば今ゐほあり。和主が身ゐかえ甚しとゆゝく領け一衣ゐまばこゐとのゝその霄腰ゐ著て吉見の宿所を出ゐ紀と。淺良井とゐが物ゝう。友鶴とゐゐ廻ゐまゝ一紙吾侍も其外ゐ居あり。和主が孝心彼婦人の篤実律義ゐ我折ゝう。今ゐ度あゝふと説示せゝ義秀咲て頭を拊さ侍忙一紙折ゐふゐ。ゆゝる衣ゐこゝゐゐ二ゐ紀宝といゐまゝ一紙。うち忘ゐもせゞゞ携ゐゝく。友鶴ゐ廻ゐゝ流石ハ武士の妻ゐけり。人ゐゞゐゐ信あゝゐまゝ亦信ゐゝんや。友鶴ハこゐゐも愧て涙ゐ人を折歎くゞゝゞゞ只彼衣を実の母ゐも義秀ゐも見ゝく慰めゝゝとゐもくゐ侍そゝ。今宵ハゐゐ一宿ゐゝゝく。なゐ相潭ゐんゐゐ人ゐゐゐも又義秀が面をゐんゞゞ二二八一豆いひゝゝゐ慚て異ゐゐゞ紀ゐせん欺さゐゐゝく藁三郎ゐこの

松原のゐゐゝゆく。和殿を等と密招く渠ゐを先へ遣一ゝう。今ハさゞ待ゐゞゝん日影も既ゐ傾ゐぬ疾去ゐゐとゐそゞ一ゝゐハ一三ゐゞく、嗟歎ゐ肚ゐ巻ゐ行嚢ゐう。一句一包の金ゐう出一。ゐゐハ緊要の料ゐゐゝく稲向ゐの遮ゐゐれ一。切ゝゐゐゐ受納ゝく路費ゐせゝゐゞ本望ゐゝん。九人のゐ間ハ勇士のゐゝゐゝと表裏ゐて。ゐゞく及ばぬゐゐれハゐゐゝゝく怨ゝゐ叱らゝゐゐも山岩神へ伊んゝゐゐぬゐゐゞゐゐゐ紀納ゐゐ。と真成ゐ勧ゐハ義秀取ゝゐゐ戴紀。この高金ハ分ゐ過ゝゐ。さゐれ男の好意。これゐゐ推辞ゝゝ一。路費ゐゐゞ一。と懐中へ楚と納めてゐを起せば。一三ゐ亦身を起一。和主ハ何囲を心ゐてゐ彼人達を索ゐゐゞ。ゐゐゞくゐ友鶴ゐゐ一筆ゐゐゐゐゐ返さゞゞゐ。といゐゐゝく逆ゐ西をゐゐゝう。彼井平が舊里ハ近江の叉賀と侍ゐるゐゐあり。又信濃ゐゐ氏族ゐゞゞ。さゐゞ必冠

者ゝ勧ゝ由ある里ゝ留まるべし。且江信二國を索ゝ遣ゝ亦復便宜ゝ任せん。その先ゝでハ定めゝ又友鶴へ返書のゝハ不慮の證据とゝるゝあり。或ハ途ゝ送ゝ或ハ賊ゝ掠らゝとゝ雖ゝ死ゝハ口づゝ。阿爺よりゝ死ゝ傳ゝくゝ。そハ宮ゝゝ。ゝゝ。誘ゝ人ゝゝ五六町。共侶ゝゝ日影樹間を漏ゝ掩ゝ名殘ハ竭ぬ林原。ゝゝ別ゝゝゝ義秀ゝ歩を駐むゝハ一三ハ叮嚀ゝ再會を契ゝ。途横ぎりてゝ人を木かゝゝゝ目送ゝ。

作者云先板第二編巻の四の二丁の左ゝ。二丁の右ゝ至て義秀ハ淺良井小三二ゝ菓二郎を撫けゝ。越中婦負の岩神ゝ。稲荷ゝ宿所へゝゝ。落ゝ遣せゝゝ。武廣光ゝ告る隱ゝ菓二郎を恨ゝ引太郎とゝゝ。彼引太郎とゝゝ者ハ第二編の端像ゝ見えて菓二郎ゝ後第二とゝ忘野の松原ゝ。その伯父苗四郎と共ゝ時夏ゝ移きゝめゝ。ゝゝ。ゝ誰ゝゝ。ゝ老ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ刻成ゝ後ゝ出せゝゝ正ゝ神ゝ暇ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ行ゝ。因てゝゝ。ゝゝ。ゝ語ゝゝ澄文の出ゝ後ゝとゝゝ。

中輯第廿四

山寺乃古塔婆
駒形の老婦

吉見冠者義邦ハその夜さり勝澤の松原ゆく。後陣ゝ敵を禦んとゝく。井平と支別西を望ゝ走ゝ。ゝけゝゝ仇ゝ遭ゝ。ゝ伏兵のゝん。ゝゝく。足場を揚り。樹支を猶ゝ。半晌許立在む程ゝ曉ゝ近ゝ天の色倏忽ゝ結陰ゝ。颯と音ゝる風のゝゝ。驟雨盆を覆ゝ如ゝ。樹蔭のゝゝゝゝゝ。身ハ只濡ゝ濡てゝ。ゝゝハあきゝも井平ハ今

なほ讐を拄る欷歔ハせざりや。と想像る。心も天に野干玉の暗きが上に
降そゝぐ。雨に樹蔭を出難かり。かくてやゝと待程に雨歇雲ハおさまりて星
の光りも明るに近かり。今までも井平が。敵の囲みをいまだ来ぬハ勢れたり
けん。不便なりかるせバ。共侶に大刀の刃の續くかぎり。只切死に死べかりしものを。
今ハそや時移りぬ。立ても居ても甲斐なくハある。井平既にかくのごと。廣光も
今ごろハ領主の討兵を拄て。擒られし欷歔されし。欷二つに一つハ遁れなべうらぎ。
歎されの存命て誰とよぶに艱苦を凌ん。死べき時に死ざれハ死にまさる
恥ハゆうと恥辱多し。腹を切んと立ながら。刀の鞆に手を掛つゝ。いやまてしばし
ながら短慮の死ハ易しく生ハ難し。その井平ハ捕れしとも脱れしとも
定かならぬに。早まりて死なバ亡後に彼にも恨られやせん。その存亡ハともかく
もあれ。既に断金の交わり。朝夷生今なほ現に加北にありといふ。

この人を訪てこそともかくもすべけれ。と胷に向ひ。胸に答て。被ながら衣をかき
よせ絞り。濡れし便の捨笠取ておしいたゞき。北闕を投て赴けり。心
ほくしぞ哀れなる。されど稍に義邦ハ。かくといまだ幾里もあらで。天ハ明ぬ。人の
往還さへ鬱悒ければ。又さらに再度の追兵心の外なし。間道よりぞ進ん
とて。路なき途にわけ入り。熟ぬ草鞋は破れまくハ荊棘を侵て足に
血を染め長き裳裾ハ裹ても。拂ひぬ草葉いと露けし。或ときハ湛ころ
野水に臨て。己が面影の窶に驚き。或ときハ嵯峨たる青巖に吻て。樵
夫牧童に途を問ひ。朝ハ林鳥と共に出れども。夕の棲宿に惑ふ。昨ハ
郷黨の上に在り。今ハ萬里の客なり。日に歩み夜に宿りぬ。かくして加
賀國小松の郷に来て。訪へバ佐味笠内ハ蹴踘をもて。新将軍頼家卿に
召使れ去歳の春鎌倉へまゐりたりと聞えしかバ。義邦ハ漕舟乃。竹棹にも

撮を失ふごとく。進退甚処に極りく。又いつもとんまびあり。坐内かくの如くあるかそよ吹風の伝りゆゑ。その氏名を告ざるべ。去歳のその月朝夷生と紹介せしを悔しけれ。彼人さくへ尋来るさそを吾倚を恨をけめ。この春さく立在りさそあるべるあるざるべ。次の一ト日ハ且客店よその夜をあり。逗留しく。ようつくく思惟ゆよ。井平も廣先もけゆゑで追ひ着ざるべ。

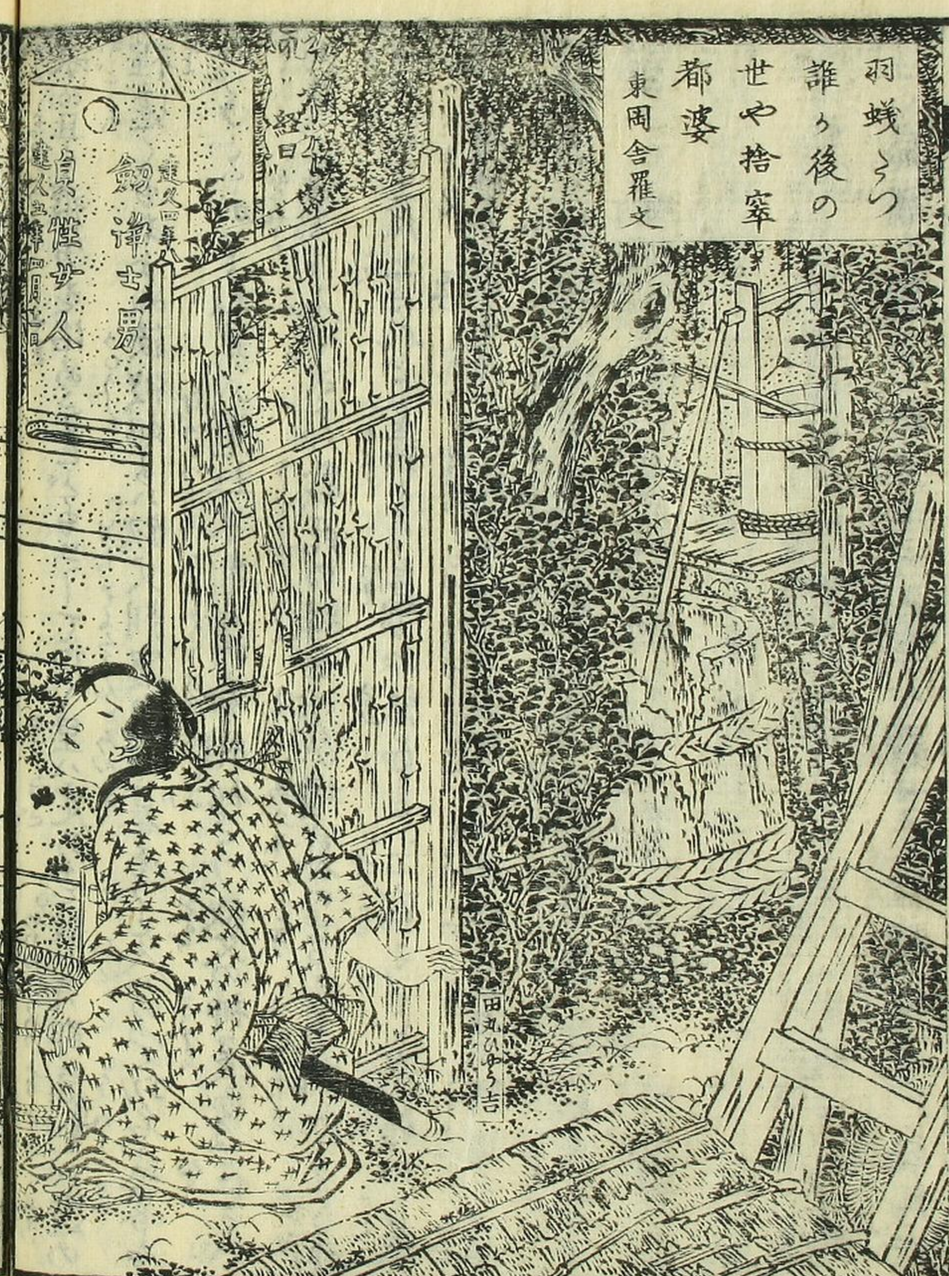
彼ハ稚き我ハ又捕捕まるに疑ひかの。おの小松ハ商賈ヨマくいと熱閑し紀里あれハさるる知音のあるどしく。世我潜ぶべ処よあるど。曩よ義秀ぎ紹庵まく。陸奥へとて去んとすをられ懇よ紹めしく。佐味を憑とて遣しう。彼ハ空内ちるざるべ。義秀ハちくよりして又更ハ陸奥へ赴紀るあのあるべ。恨しくハ投てゆ。里の名ざれ。ゆゑ又跡を暮るる術か。

ちるとも縁盡ざハ。五十四郡のいと廣紀も。ちるど四ハ手ちるんゆハ環會ざるとゆハあるさでも陸奥ハ大國ゑ経任ゞ乱ありとのふとも。世我潜ハちるゑ便宜あるん狩直ハ彼地へ赴くべしとかるかハ思ひ決つ。あるを振て奥へゆく。道の程を問あどるハ客店のあるがのつ。おより奥羽へ越紀るハ。いとも遠け紀旅あるるゑ。遠究めく難如ヨマる。水行を始ひのどハ。當國川尻湊よハ奥へ渡る便船ヨマかるる。あるよる件の港口ゆく六里有餘もひんいと年弱紀方ざるの。独行よとろ紀ばるるるくゑ水行ちる。赴紀るゆと勧めるる義邦つくうちゆく。むる文治のちるゆ。ちる叙又九郎判官。かちく冨樫の関代越て陸奥へ赴紀あるくとのふ途の艱難支の蹟ハ人の口碑ハ伝くゑ伝りそ。ちるハ主後七人。ちるハ只為ゑちるる。水行あるるでハ叶じ。とるくハ途代石上ゆりるる支の蹟ゑでゆ。ちる憂ゆるかこと

まく。公卿さまく係ども。さらぬ容ゐてゐく。詰旦旅宿を出く。川尻の港口ゐ赴く便船を求ふ。おくハ越後の新潟。出羽の象潟へ交易船の往還まると月うく絶ると。この日も奥の商船帰帆の纜を解くあまた。羽邦是ゐ便船く。大洋ゐ漕ぎけり。さまく朝夷羽秀ゐ。かく〳〵黄光を投掖ゐ小松の郷へ来つる日と羽邦の乗船と同日ゐく。朝と夕の差あまた。竟ゐ送り見をまぐ只ハ是時運といひあり。一千日の遅速ゐよりて。その往方ともまるゐ。ゐ。遠臧ゐ傍べ死るゐ。かく〳〵件の商船ハそれ日纜を解くまとも。次の日より順風罕ゐく。此処の港口彼処の泊と。船歇まゐ日を送り。四月ゐ及く著岸せり。そもとの船象潟へハ著ぎて陸奥国氣仙郡尾崎の浦ゐ還まる。羽邦ハ去の数日。熟ぬ水行ゐ掻悩さまて浦の苫屋ゐ著ゐけまく更ゐ治ゐ心地ゐくそまく其処ゐ旅宿と求め且く疲労を治めまとも。さて里ハ定めぎと盤井郡高舘ハ道の程遠くゐあらぬ欲彼処ゐハ叔父判官の墳墓あり。人ハ人ゐ功名武器ゐ及ぶ。ゐかくぬゐハ寃枉不幸薄命相似く。叔父の神霊ゐ在さば。同憂を憐ざんや。さらば戦死の趾を訪ひ。墳墓の苔をも拂へ。くく尾崎の宿ゐ泊ぜれども。素より急ぎぬ旅ゐハ二宿ゐく高舘の古戦場を歴覧し。水を渉り山路ゐ入く。玉造郡ゐ。羽経の墓ゐ拜謁し。要時武運を黙祈ゐ。懐舊の涙を決ぎ。ちゐ山路を舊来し。隨ゐ盤井郡ゐ立入りく。駒形山の麓を過ゐ。今朝を忘く四月の日影も下晡ゐ。

けまとこの処。ゐまところゐく。住む人稀ゐ。ゐく客店ハあまくもあまど。とまれば右ゐある茂林の中ゐ一座の梵刹ありて。大門ハ路傍ゐ建て。仰ぎく扁額を瞻る。指月寺の三字を題せる。柱礎斜ゐ。門扇傾ぎ

九月廿日
明丸御手墓
天
夜叉之墓
西壽二年七月廿日
弟魏百姓盛長尋立
時建仁元年十月建
時建仁二年月建


羽蟻ゝつ
誰ゝ後の
世や捨窣
都婆
東岡舎羅文
経日
建久四年
剣禅士男
自性女人
建久五年閏月廿日
田丸ひやゝ吉

さまでも尋常の造りざまにあらざるに秀衡が世ざかりの時由緒ある道場
なりけんと推量らる日ハ暮んとすれども道遠しとて宿をとゝのへ肚
裏に尋思しに角門より進み入まゝに地内ハ廣く本堂狹く茅葺に
して堂の傍に玄関めきたる処あり庫裏とおぼしき処あり昔の名殘ハ
夏草の間に見えたる礎のみ墓所の外に一物なし義邦ハ玄関のかたち
近く進みよりて西三声呼門どもに誰と応るものなし法師ハ背門に
なりて堂を左へ遶て入るに跌上りなく卵塔多くして畳たる土
饅頭離れたる草に包まれて拂ハぬ苔に花を開く身のなる果ハ誰も
みなこれをうらと觀ぜまゝ外の哀をも身に入て墓石に腰かけて
人の多く一ツ二ツ続む程に劍伸士男と字せし右辺に建久四年八月
云云とあり又推あらぬく貞性女人と字したる左辺ハ建久五年四月

十一日とあり傷ましき窪都婆あり録せし梵文ハ半體低減なれ
ども梓氏治部丞七回忌追福抜苦与樂の為ゆを正治元年八月施
主敬白と大書せし二十六个字ハ鮮ら見えあらず幾後まとる羽蜻
蛉窪都婆の朽理ら跋纏へり義邦ハこれを見てあるの中にふく
訝る梓治部丞有友ハ先人の老臣なり當初橋太左衛門尉高保
ホと共ら濱の宿の館を成く討るの武士刀野係杖照時を防戦ひ
尸ニ朝の兵火に焼しく名を十年の今に留めし忠義ハ伝へて見れも
ひとりあるまじきこの陸奥の果まで渠が為に追善の塔
婆を建しハ誰あらんその親類欤恩顧の者欤と昔の人の恋しきに
同ふしもあれ墳堂惆悵として立在て偲処に廿五六歳なるうんとおぼ
しき男子拷の夾衣の裾短なるを被て腰ゆハ一口の短刀を帯みゆハ

二本の卯花ゐ阿伽桶を含みそそぐ。件の墓の邊ゐ来つ。義邦を見て。又見つゝ。その墓ゐ水銭沃ぎ花銭ゐ向て跪礼合掌し。念果て身を起し。又これを見る。義邦も亦不審さゐ立ち沼去らざりこの男子を見まびあはゐひろまてや。進みよりて小腰を折め卒尓ゐハゆゝしもゐ人ゐ。蒲殿のおん子ぇと仰ぇる。吉見冠者ゐ在ぎゐと。問まく。義邦胸打騒げど隠しそびあ。ゐ多んとゐひろえしく莞尓と笑ミ。これ則義邦ゐ。抑和殿ハ何人ぞと問久されて忙しく。身と轉しく額をつ礼陪臣の子でゆゝバ世の人ゐ及バせゐ人ゐ。某ハ梓治部丞有友ゐ家隷馬艱標太ゐ一子ゐ同苗標吉郎と申れしあゝ故主てゆ治部丞ハ去ぬる建久四年の秋濱の宿の館ゐて。討兵を拄く陣殁せしと礼。親ゆてゆ馬養標太も乱軍の中ゐ殺まてう。その時礼某十五歳父の教訓已て我沼去母れ

俱しく後門ゐ逃れそうとの駒形の麓の郷土田九郡内ゐ女房ハ母ゐ妹ぐゆゝバ。躯て陸奥ゐ落ぐり。親子田九ゐ身を寓く年来経ぐゆ礼ぞゐ。ゐ母ハその次の年持病の血積ゐとり詰ぐまてゐくなりしハこの月。こゝゆ今日ゐ亡日ゐり。この時礼某廿歳ゐ足ぐまぐ。ぐち続てく親を喪ひ。叔母叔母夫をゐぐゐゐく。渡世のゐると相潭ゐ郡内ゐ子ゐけまゐ則叔母の養子ゐせまてく。ゐぐしこの地ゐ駐ぐゐ。又駒形の一村ハ泰衡國衡戚亡の後漸くゐ凋蔽しく。今ハ家数四五軒ゐ過ぎこれゐ養父ゐ呼德も年くゐ衰果て初ゐハ仏ぐくもあぐこれさゝ去歳の九月下旬黄泉の客とゐりしゐ今でゐ養母と某の所帯の山の木を伐出し。或ハ獣を獵ゐて生活ぐくひゐり。さてこれまでゐ嗚呼ゐましく。ぐゐゐ人銭亶ぐとゐん疑ひを釋んゐゐ。かくく近属世の風聞ゐ蒲殿のおん子白鳩丸ハ下野國足利ゐく

人なり。吉見の冠者義邦と名告せるものあれども道遠けまば。
ちろもいひつゝ彷徨ひなまぢさ伝かも今又伝より〻彼君ゆはあぐど
やとゝいふだりの試よ。卒尓よ物いひうけ〻を憚ゆ人氣をあく。言下ゆ名
の告せるものゝ是偖古主梓殿及亡父母の導る狩ゝ実母の稔月あを
ども生活ゆ暇ゆ有平日より遥く詣ぞハ不慮の見系ゆ入りゝかん。
いと欲くゆとゆゝるく〻ゝふゆん義邦頻ゆ感嘆〻く撥の伐株ゆ尻を
うけ。原来ハ汝ハ梓が老黨標太と安人が子なり狩ゝを邊境ゆ呻吟
へば。舊縁の人と邂逅〻く大ゝゆとぞちゝづゝ。そも又汝ハいゝゆく。
これを義邦と知ゝぞと問れく摽吉声を低め君ゝろ〻召れぞや。
追捕の沙汰最密ゝく。奥六郡のバさゝゆり住む人稀ゆる山里ぞぐ。
経任一味の反逆人吉見冠者義邦そゞ等類某甲某乙と四人乃姓

名を識〻ゝろ骨相書ゝ某甲ゝろ〻君ゞ面影彼骨相書ゆ似ゝ世
ゆのゝゆゝと治部丞ゞ為ゝ建ゝろ。窪都婆ゆゝろ〻あゝゞ出て去ゝ
たまゝ為体いと訝〻ゝ〻ひ〻ゞ舊恩舊義の竭ゞ所狩他人ゝ
如此ゝゝまゞ危ゝゝゆゆゝゞゞと真成ゝ密語ハ義邦他のゝゝ警戒
原来奥の盡孤ゝゞ。ゝゞ人隠ゝゆゝゝ現ゝの磐井の一郡ゝ。経
任ゞ有龍る。平泉の柵ゆ遠ゝゞ。一点ゆ逆意ゆ。終ゝを修羅五
郎経任ゞ一味与黨とせゝゝとみゆゝ詮者の誣罔あれども。一朝
ゆ説盡〻かゝ。汝故主の恩義を忘ゝまゝ有友ゞ為ゆ七田の追薦を
奉〻ゝゆゝの志極〻ゝ。ゝゝハけゆ叔父判官の墓ゆ詣ゝ。この刻ゆ来く
日ハ傾ゝぬ宿をゝん人と寺内ゆ入りく。呼門どゆ応せゞ法師ハ背門ゆゝん
とゝひく墓所を過らんとゝゝゝゝこの寺伽藍の名残ゆゞ。ゆゞかくゝで

頼まるゝと問ほどに。標吉さらバ鎮守府将軍秀衡ぬしの時まで八祈願所でありし。泰衡国衡亡びしより。坊料を失ひて今ハ同宿二人のミ住持ハ券縁のなきこの春より国府に出て寺ハあれども某が養父郡内が菩提所なれバ実母をも此処へ葬りぬこの墓石ハ某が二親の墳墓なり。又右なるハ養父が墓也今より八四个年前正治元年の八月ハ実父標太が七回忌に当れり。故主治部丞が陣没も同年月なれバ日こそかはれど。標石をならべ卒都婆を立て。経を誦せしめんとて長物がたりに日ハ没果つ旅宿をバ何の里に定めたまひしを定て孫どもも某が處ハあらん。山ふところの孤屋なれバ。茲より十町にハ過ぎず進らせ[?]めまゐらせバ潜ひたまへ究竟の地。誘ひて郷導つかまつらんといふ義邦ゆゑぞ感謝に堪ず。さればと孤鴈の侶を失ひやすく蝸牛の宿をしも定めず。不憶も武士にあるまじく舎蔵んといふに。何ぞ他を求んや但その養母のうけ引くべきや否ざるをまたざるのミ。否そのこゝろハなかろう。安かれ養母といへど実ハ叔母之母の妹でゆへハ鎌倉ハ故郷なり。これにハ包果[?]べくもあらう孫ど強顔なれ欵待ハ仕るべけれど。その性浮薄に似まれども年来悪意なき人ならバ後安く思召まで幸ひ途すがら日ハ暮なんとさせ給へと勧まに義邦ハ歓びて角門より走り出標吉に導れて駒形村へ赴きけれ果して途にて日ハ暮されバ標吉ハ憚りの関もなくて義邦を宿所に伴ひ養母黒萩に云々の趣を告るに義邦ハその心を取んなる。腰に纏る沙金四十両をとり出し。吾侍ちてに在らん限今安に不用乃物也且く関になれかし。惜気なく遁与ふ人ハ黒萩ハその人を怙ざるにあらねども。この金を見て些も操ぜず遠ざけて飯を炊き義邦に

勸めつゝ。只いつまでもこゝが宿に潜せなんと佗ることもなく歎待なしぬに似ざり
けり。さてその夜さり義邦は刀野時夏に濡衣を被せられ冤屈に死せしを知
りて足利を走りしより廣光井平義秀が人々にあちもなく告なんば標
吉頻に驚嘆し。巻母黒萩共は侶に時夏を悪と憤りし。又廣光は二人が
往方のふと想像るやうに縁由を告しより義邦の薄命をいたく痛まし
くぞ思ひける。かくて親子が誠心に義邦は稍おこころおちゐて吉見を逐電
せしる夜より僂は四十餘日。今宵ぞはじめて枕を安く寢に就なんとする
べし。却説標吉は聊思慮あるものなりければ訪ふ人稀なる山里なりとて
一点も油断せずその次の日より義邦を奥ふかく潜せてその身はさらぬ
容よそほひ。山挊に怠ることなし。さる程に夏は過て山里に衣うつ秋の夜長き
比になりぬ。さればゞ鄙語に人の褒語も七十五日と定めたるも所以あるかな。義

邦追捕の風声も遂に聞えずなりにければ標吉は黒萩と商量し。吉見殿の
いといたう窮屈にてえあるに今は人目を忍ぶも要なし渠は誰と人問ば。
鎌倉に遠しする標吉が才ととも從才とも以ひ暗めんに今は怪む者あらじ
とて義邦に由を告て。なかなかに憚らず假條に名を喚かへて黒萩を叔
母のごとく標吉は兄の如く。親のひざるを改しば義邦も亦あらじ親子に人目
ばかりは使れたり。抑件の黒萩は原は和歌鶴と喚れたる大礒の遊行女
なりしその姉は武士の妻なるになどく妹は河竹の流れにエエしとをするに。
黒萩は年十六のとき密夫に誘引出されし果は花女に售遣られしく夫は往方
知れずなりぬ。黒萩が二親はこれより先に世をさりしかど姉なるもの慚憤りて。
年来安否を問もせず問せもせず過る程に奥の磐井なる駒形村の
郷士田丸郡内有一年鎌倉に出府しく。逗留の間ごの和歌鶴にふかく馴

深く別るゝを忍び泣ぎ苦界の年期も今既に絶ゆるありぬと他のこて身價も廉あれバ竟ゆ和歌鶴を購出し故郷へ伴ふて及びくそゞ妙ありと佐ゝ郡内ハ又さゝゆ和歌鶴ゞ為ゆ人をかく。その妙と妙夫ゆ勧解させ馬養夫婦ハ黒萩が郷士の妻ゆあること他のて心の中ゆふく歎び証て勘當を許りて田九郡内共倡ゆ召よせて對面し黒萩ゞ衣裳調度を造り立夫婦ゆ餞別さ送る亟あくとゝ也しハ和歌鶴ハ妙こ夫ゆ辞しられ。郡内ゆ後ひく駒形村ゆ赴ゆて。乳名黒萩よりかくりて尤餘年の星霜を送り去歳の秋良人ゆ後まくく孀婦ゆ成あるとれども甥を養子ゆ

ちくまびよろづゆ公ゆてゝ思ひ出ぎ暴ゆハ妙夫馬養標太陣殁しく。妙とその子とするくと鎌倉より来つるこゝ黒萩ハゆゞ妙あゞう。その恩義いと高けまびゝろよく歎待くあるくゆ己を慎く。郡内も亦信あつめあり

けまゞ妻の妙あくありく後ゆ標吉を養子ゆせしゆ標吉も亦老実なる壮佼あまゞ養父母ゆ孝ゆあり。かまゞ一家和合しく。里人ゆ誉られゝ。そゞ中ゆ黒萩ゆ一ゝの瑕疵あり。河竹のむしりゝゆ。今もあゆ酒代嗜こそ酔へハ男子ゆ狎易くゆゞりかゝれるゆ。さまゞ嬪婦ゆありての後ゆ皺めゆ顔ゆ紅粉を施し鎌倉様ゆ結髪しく五十ゆ近く老女ゆ似るし。現去歳の秋その良人郡内が世代逝アしゝ比毎ゆ指月寺へ墓参りして彼寺の住持塞玄と親くあ代ゆ初ゝ。早晩ゆ密通しく人の嘲をうゝ人ゞ。今茲ハ塞玄四府ゆ遊く久く寺ゆ在ざまゞ夫欲ゆ折あるゆ義邦の臈闌ゆ女子あくゝ人ゆ有りゝ男態ゆ立ち惑ひく人ゆ有ぬ身を焦せどもこゞ齢ゆ付まゞ孫ゆあもゞき弱冠ゆ有もその氣韻高けまゞハ就れ言ハ苟且ゆ。いひよゞゝゆよりもあく。宝の山ゆ入りあゞう。空ゆ徒空くゆる心地しく。五六个月を

送りて居るに、ひたすら愛しさのハ、ふと雨にて堪らまじ。既に夜寒になりて、
又標吉ハ毎夜に獣を猟んとて暁くまで黒萩ハ折しそうけれと
目間ふ抱をいつまでも情郎ハ足えくまどあ分能しやと敲れさき北月のうくふ立
ちて。秋を掖えて紙鳶れくらゆるさ紙鳶ハ黒萩ゑ為
体ふ未果て腹たくしくふあるとども。乳ゑふ頭さどいて暁くぬるちて。
とうとあらでとうせーバ黒萩ハ為ふりまふとそのかうさるゑふ中。この人既に十
八歳色情あれてあらざあれどそのるふいと鈍れふ苗ふ所云晩稲ゑべ。
あるとうの人ふ酒あくハらでう情を惹とあらんと竊に准備しう今宵もゑ子
標吉ハ弓箭を携て出くふ黒萩ハ酒を温養をあくゑ邦のはるふ
按排かう山家ふ際限もあく世を潜せるあうあん乳も襟結れるゑべ。
一度過くく伸寝あるに用意くくはらるのふ人の底意ハえふねゑ推辞べれ

よりのあけまゑ邦ハ勧うく盃を短く受飲盡く措ゑハ黒萩ハ浅黒れ
額の皺をちよ寄くに茫然とうち咲くうくそのあん盃のうくんとのやうくゆく
とう揚くくも戴れう独酌ふ西盞かさて邦ハ進くれども半盞も受ど。
困ど果てそしふくけう黒萩ハ只酒の勢ひを借らんとあるハ邦ゑハさのく
陰ひぎ引受くく喫役ふ顔の黒れゑ紅色を帯く柿紅葉の如光澤ゑ。
蜂谷ゑ張れ助うも目を糸のくく邦を折くれるのさらくさ嘔吐もう
べれ心持ハきゑどゑ邦ハこれをも忍びくく今宵ハ小悪あり。許くゑと為を
起くく臥房ふへるを黒萩ハあるゑげふ目送りく盃盤をとて納め躍れゑぐ
行燈を引提くものゑ臥房ゑ入りぬ且くく黒萩ゑ頻ふ嘯れ苦む声を邦
邦枕を歌てあるでの老女ハ酒ゑ過して吐を反くゆあるゑ欲さるゑ食傷
せーのあるべ。憎くとりくどうちも措きゑ躰て臥房を起出く納戸の紙門を

老婆心
公子を苦しむ
ひゆう吉郎
よーくよ
黒七郎

推ひらめ苦痛の声の佐めれバ邪力あるくいと苦式ぞやねうざる。心地ハ何と
いと問きく黒荻声たえくふうち臥せーようとぞふ疼ぶ没まくく堪
ぞ。願ふハこの鳩尾を押へくえどのひあくど頻よ喘苦くく已ざれバ義邦
邦辞さふよーもあくほとるるつへるくその胸膈へ堂式推當く苦
痛ハさらよゆ狩と問れく黒荻娯ーげふいふ猶廻よ下ふ侍ふ。ふつぶて
狩ふるとわざかーやさふ侍ふ。とふ式舎て抱式よせんとーとふ義邦
怒ふ堪ざーく。巻式引く黒荻が頤礪と打ふやうせ恥をふるざる老女
ふ。義邦をいつふるのとふひとりく調戯とるや。こハ狂人の沙汰るべー。
り向後と慎ふ標吉ふ佶と告ふ年ふも愧よと罵く席を蹴立て
出ふハ黒荻ハ消ぬるぞるふ打ふく雲時ふのいるぞ起ふ。うちち
俯ーく両ふ頤抱ふ。その苦痛半晌ぞふ。やふるふ今ふく指を

ひて齦を拊ふ須日揺動ー糸切歯板歯も一枚脱ぎふ。あふ悲ーや。と
吐出ー堂ふ受載く。惜めどもその甲斐ふー履ふーあふ胸ハ只浅間獄と燃
ぞふ富士の煙の靡ぬ人ふ今とく怨ハ復されぞ落魂人を扶持ぞふ損
ありく得ふー。と昔も今もいふあるふ況や反逆野心の徒木を伐ふ草を刈
拂ひて索らく罪人を舎藏のハこの廣く世界ふ二人とよもあらじ。その大
恩をいひ尽きく尻暖ふる隨ふ高慢ふ親ふのまぞ女ふ式抗打ぶ
てふがふ恩ふをぞ人でふー。情ふー郎。竟ふハいひふせんのをと泣つ怨ふ
潛音ふ通霄ふ。ふ呟ふ。ふ式ふ義邦ハ臥房ふ走ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふふく睡ふまぞつくくとふひくせぶふれ一旦の怨ふ乗ーく黒荻を拳ー
と短慮とのハもあふるとよーや彼老淫婦ふ礼ふる所ふ逢ぶとて。
これ隨ぶふ何ふあふん婦人の性ハ僻て妬ふり。そぶふふ打懲ととも。いふ

でゝ非義を改むゞ死骨髄ゝ徹るまゞ。これを怨バゝ、ハせん。されバこゝこの
ゝを標吉ゝ告ゝとも渠ハ甥ゝ養子ゝ養母の非を非と仆ゝゝ渠只愧く
これを遣ゝんゝゝゝ是を非と仆ゝゝバ不良のゝゝと毀さん欤これも亦
量りかゝゝれバあゝゝ標吉ゝゝ告ゞゝゝゝゝ告ゞてゝく嫌忌の家ゝ。
あゝんゝゝゝいゝく難ゝ。ゝれこの丸を立ゝゝとも乞遣りのあゝふあゝ祇ど。
いゝふせん廣光井平ゞ存亡定ゝ形ゝゝと。又朝夷ゞ在知をゝゝゞ今この
一僕西友ゝゝで孰ゝ吾侍を容ゝゝゝのあゝんや進退更ゝ究りぬゝゝゝ
悔ゝくけゝと百遍悔ひ千遍悔どもよふせんとゝハゝゝゝ果せゝゝ黒
荻ゞ非義の怨ハ釋ゞゝく又義邦を老くせゝ。その一條の物語ハ更ゝ
第三巻ゝ解分ゝをゝて ゝゝん。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之二 終

早稲田大学図書館
011888007271